



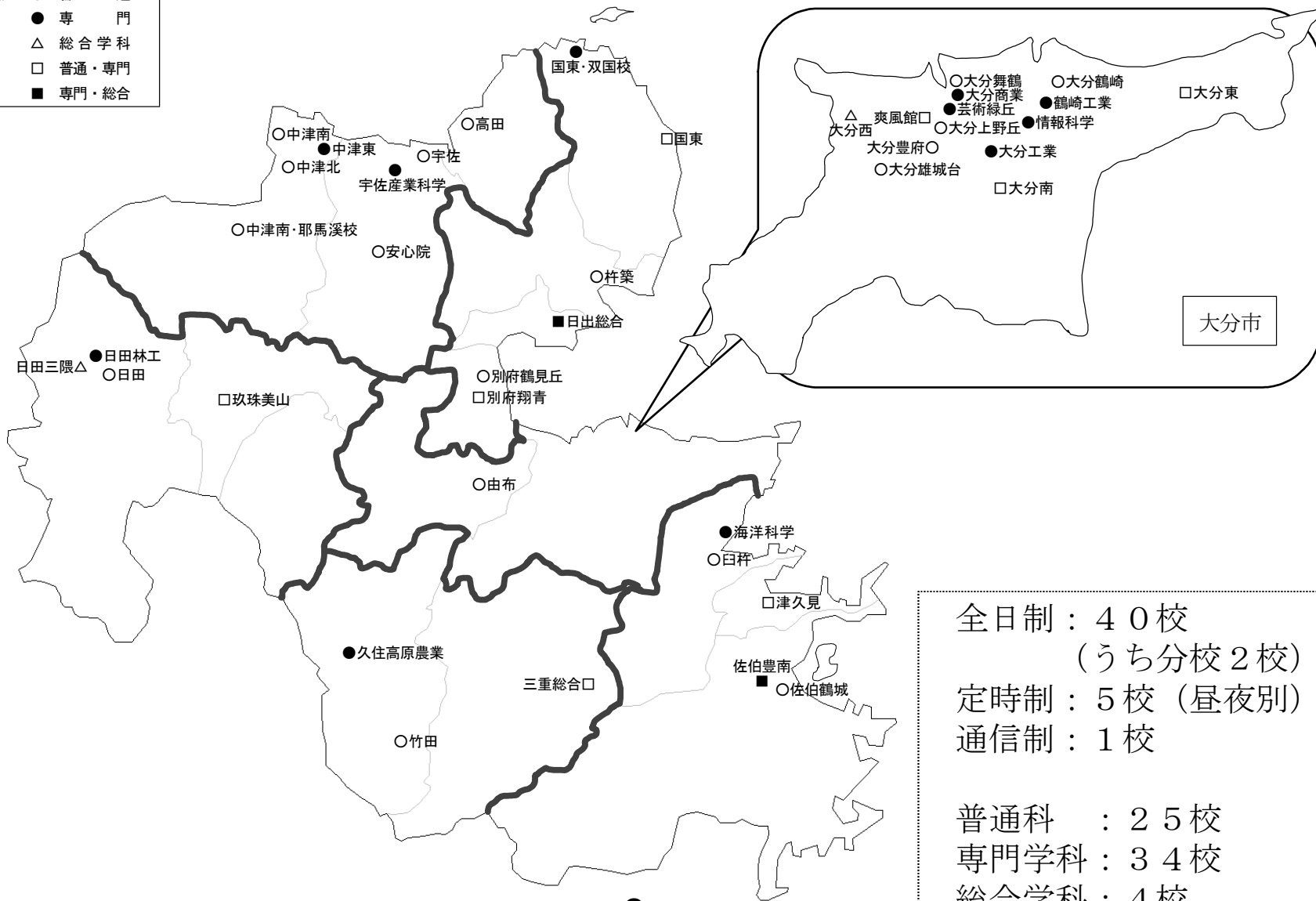
大分県立高等学校における 「高校生のための学びの基礎診断」の活用状況等について

令和2年11月30日
大分県教育庁



大分県立高等学校の配置

- 凡例)
- 普通
 - 専門
 - △ 総合学科
 - 普通・専門
 - 専門・総合



全日制：40校
 (うち分校2校)
 定時制：5校 (昼夜別)
 通信制：1校

普通科：25校
 専門学科：34校
 総合学科：4校

1. 「学びの基礎診断」の実施状況
2. 取組の紹介
3. 今後の展望



「高校生のための学びの基礎診断」取組の開始

平成30年12月26日

「高校生のための学びの基礎診断」の認定について（文部科学省初等中等教育局長通知）

「基礎診断」は、高大接続改革における高校教育改革の重要施策であり、高校生に求められる「基礎学力の確実な習得」と「学習意欲の喚起」を図ることを目的としています。

「基礎診断」は、本年3月に制度化したものであり、国語、数学、英語の3教科を対象としています。

民間事業者において創意工夫を凝らした多数の測定ツールが開発・提供され、これを学校現場で積極的に利活用することにより、生徒の基礎学力の定着や学習意欲の喚起を促すPDCAサイクルの構築・確立が促進されることが期待されます。

各都道府県教育委員会に置かれては、・・・所管の学校・・・に対して、基礎診断の認定について十分周知していただきますようよろしくお願いいたします。

「高校生のための学びの基礎診断」活用方針（平成31年2月）

- ①原則、全ての県立高校で受検
（どの「認定ツール」を、いつ、何回受検し、どう活用するか、各校で検討。）
- ②各校では、「学びの基礎診断」を「学校評価実施計画」の成果指標や「授業改善スクールプラン」「授業改善マイプラン」の検証指標に位置付けるなどしてマネジメントツールとして効果的に活用すること。
- ③その際、中学校段階での学力調査の結果との相関や高校段階での推移を把握して、中高の一体的な指導のあり方の工夫・改善につなげること。
- ④「学びの基礎診断」認定ツールを利用しない場合は、民間業者によるその他の学力診断ツールを利用したり、「知識・技能」と「思考力・判断力・表現力」のそれぞれを適切に評価できる問題を各学校において作成・使用したりすること。

国語・数学・英語の3教科セット型を、1年・2年の各学年で少なくとも1回受検

各校は、年度当初に活用計画、9月末・3月末に基礎診断活用報告を作成し、高校教育課に提出。高校教育課は、活用報告を取りまとめ、各校への指導助言に活用。

(参考) 大分県における学校マネジメントの取組

「芯の通った
学校組織」の
推進

H24. 11

H29. 4

R2. 4

▲
推進プラン
(第1ステージ)

▲
推進プラン
(第2ステージ)

▲
推進プラン
(第3ステージ)

県立高校の組織的
な授業改善

H27. 6

▲
授業改善スクールプラン、
授業改善マイプラン策定

- ・授業改善PDCAサイクル（各校・毎年度）
- ・学校評価（自校評価）とプランの連動を図る

高校生のための
学びの基礎診断

H31. 2 9 R2. 4

▲
県
活用方針策定

●
R
1
活用報告提出
①

●
R
1
活用方針提出
②

◆
R
2
活用計画提出

本日のご説明の
範囲

大分県立高等学校が使用しているツール（令和2年度）

認定ツール名	学校数
【基本タイプ】	25校
基礎力測定診断 ベーシック	2校
進路マップ 基礎力診断テスト	23校
【標準タイプ】	38校
進路マップ 実力診断テスト	5校
スタディサポート	12校
スタディープログラム	1校
ベネッセ 総合学力テスト	21校
【その他】	6校
自校テストのみ	2校
基礎診断以外のツールとの併用	4校

基本タイプ：義務教育段階の学習内容の定着度合いを測定することを重視したタイプ

標準タイプ：高等学校段階の共通必修科目の学習内容の定着度合いを測定することを重視したタイプ

※コースや学科ごとにツールを選択制にしている場合があり、合計数は学校数と一致しない。

基本タイプを使用している大分県立高等学校

認定ツール名	回数 (計)	1 学年											2 学年												
		4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
学研 基礎力測定診断 ベーシック (2校)	2		●							●								●							
進路マップ 基礎力診断テスト (23校)	6				●					●			●				●			●			●		
	3																●			●			●		
	6		●						●				●					●			●			●	
	5			●									●						●				●		
	4	●	●								●										●			●	
		●	●	●							●									●			●		●
		●	●	●	●						●									●			●		●
3				●														●			●			●	
2			●		●													●						●	



普通科



専門学科

標準タイプを使用している大分県立高等学校

認定ツール名	回数 (計)	1 学年												2 学年											
		4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
進路マップ 実力診断テスト (5校)	4				●																				
	2																								
	1																								
	3																								
スタディサポート (12校)	3	●																							
	6	●																							
	5	●																							
	4	●																							
	3	●																							
	2	●																							
	1	●																							
スタディープログラム (1校)	5		●																						
ベネッセ 総合学力テスト (21校)	6				●																				
	4				●																				
	6				●																				
	4				●																				
	1				●																				
	1				●																				



大分県「高校生のための学びの基礎診断」活用報告

各高校に求める報告項目

※9月末、3月末で共通

1. 使用する認定ツールの名称、受検する学年、実施時期
2. 活用内容

- (1) 生徒の学習改善について
- (2) 教師の授業改善について
- (3) 教育課程編成と教育活動の改善について

活用内容については、各学校独自の書式（例：成績分析会議の資料等）に代えて提出することも可能。

各高校に求める意識

活用内容については、知識・技能の確実な習得と思考力・判断力・表現力の育成の観点から記入すること。

各項目の記載については、数値に加え、各校で分析した成果あるいは課題の要因、具体的な方策について記載すること。

各校の取組（令和元年度）

（1）生徒の学習改善について

○自校の生徒の成績分布を元に、次の対策のポイントを定め、授業担当者全員の共通理解を図っている例

▲前年比、経年比較などの数値比較に止まり、自校の現在の取組の成果や課題の要因まで分析が至っていない例

（2）教師の授業改善について

○結果を基に、特に学習時間を確保すべき教科を定め、課題の量の調整や授業レベルの設定を見直している例

▲「これまで通りの指導を継続し、大幅に変更はしない」との結論になっている例

（3）教育課程編成と教育活動の改善について

○教科を問わず、資質・能力に着目した活動を行う必要があると結論付け、全教科で共通意識を持つようにした事例

▲各校独自の様式による提出の場合、3つの小項目すべてに対応していない例

「学びの基礎診断」の更なる活用に向けて（現状に基づく推進）

初年度の実施の振り返り

- どの認定ツールを使用するかは各学校が選択する方式。報告の様式は、各学校の独自様式も可能とする方式。
 - ⇒各学校の自由度は高く、県教委による指導・助言も、各校ごとにカスタマイズした対応となる。
 - ⇒県教育委員会による統一した結果分析は難しい。
- 各学校における「学びの基礎診断」の受検回数、受検時期が様々であること
 - ⇒受検回数や複数の認定ツールの併用の効果について、県教委による評価が必要。
 - ⇒各学校が選択した認定ツールの種類や組合せ、各回の結果の活かし方について、方向性を見出すことが課題。

「学びの基礎診断」を活用したPDCAサイクルを授業改善や教育課程の改善に活かすため、各高校から提出された活用報告を元に、個別の指導・助言をきめ細かく行っていく。

複数年度の実施の蓄積から、より効果的な「学びの基礎診断」の各認定ツールの使い方を研究する。

「学びの基礎診断」の更なる活用に向けて（前提の変化を想定）

国の動き（教育データの標準化）

- どの認定ツールを使用するかは各学校が選択する方式。報告の様式は、各学校の独自様式も可能とする方式。
 - ⇒ 各学校の自由度は高く、県教委による指導・助言も、各校ごとにカスタマイズした対応となる。
 - ⇒ 学習指導要領コードとの対応を手がかりに、複数の認定ツールの結果に対し、県教育委員会は単元・分野ごとに比較・分析。
- 各学校における「学びの基礎診断」の受検回数、受検時期が様々であること
 - ⇒ 受検回数や複数の認定ツールの併用の効果について、県教委による評価が必要。
 - ⇒ 各学校が選択した認定ツールの種類や組合せ、各回の結果の活かし方について、方向性を見出すことが課題。
 - ⇒ 学習指導要領コードとの対応を手がかりに、県教育委員会は複数の認定ツールの出題範囲等を分析し、適正な受検回数やツールの組合せを検討。

「学びの基礎診断」を活用したPDCAサイクルを授業改善や教育課程の改善に活かすため、各高校から提出された活用報告を元に、個別の指導をきめ細かく行っていく。

標準化された教育データを活用し、より効果的で適正な「学びの基礎診断」の各認定ツールの使い方を研究する。

高校生の学びの日常的なPDCAサイクル（代替策の利用）

生徒の日常の学習履歴の振り返り（EdTech教材）

- 各高校に共通のEdTech教材を導入することにより、生徒の日常の学習データから、高等学校段階の共通必修科目の学習内容の定着度合いを測定し、評価していく。
 - ⇒各学校の教材選択の自由度は低くなる一方、他校との比較は容易。
 - ⇒県教委による統一した結果分析は容易。
- 各学校における「学びの基礎診断」の受検回数、受検時期が様々であること
 - ⇒EdTech教材と「学びの基礎診断」の併用の効果について、県教委による評価が必要。
 - ⇒各学校が選択した認定ツールの種類や組合せ、各回の結果の活かし方について、方向性を見出すことが課題。

「EdTech教材」を活用したPDCAサイクルを授業改善や教育課程の改善に活かすため、得られた日常の学習履歴のデータを元に、個別の指導をきめ細かく行っていく。

日常の学習履歴の振り返りによりPDCAサイクルを回し、「学びの基礎診断」認定ツールは全国水準との比較を主たる目的として推奨する可能性を研究する。

ご清聴ありがとうございました

